

一 赤壁の現地に立つ
平松 健

下山さんの主企画による長江流域の史跡探訪は二〇〇五年十月七日から十五日という、中高年に取っては強行軍であったが、行くところすべてが感動の連続で、小生にとっては誠に意義深いものであった。とりわけ十一日の赤壁訪問は過去何度かトライしたが機会に恵まれず、今回初めて訪問できて、もう着く前からか



なり興奮していた。

西南師範大学の馮金平教授が説明に加わってくれた。三国志の専門家であるという。

「ここから対岸まで川幅はいくらですか」

「二キロです。広いところは四キロあります」

「二里ではないのですか」

「二公里、すなわち二キロメートルです」

「三国志では二里となっていますね」

「三国志で言う二里は南軍の船から曹操の陣までの距離です。今では約一キロの所でしよう」

「一キロも離れていては降伏してくる船だとは判別出来ないのではないのでしょうか」

「黄蓋が降伏すると言うことについては事前に知らせていた。又船にはどれも青龍の旗を立てており、それは判別出来る話です」

「それにしても一キロも離れたところに船で攻め入るとすると、大変時間がかかりますね」

「丁度折良く南東の風が吹いてきました。それに火をつけると風を煽り、船は速くなる。その上曹操の船は鉄の鎖でつないでいた。すぐには逃げられない状況でした。」

二 実地観測

「確かに向こう岸までは二キロぐらいあるように感じますが、季節によつて川幅は変わるのでしょうか」

「ここはほとんど変わりません。もつとも雨が多い時は川からあふれてあちこちに湖ができます。赤壁の戦いの時は、それは関係なかったようです」

「三国時代から、長江が削られて川幅が広くなった事は考えられませんか」

「それはありません」

「赤壁の場所はここと決まっているのでしょうか。他にまだ赤壁と言われているところがありますか」

「実は説としては本当の赤壁だと言うところも六カ所もあります。しかしこの場所は『赤壁』と周瑜が書いたといわれている字（各縦一五米、幅一米）が残っている上に、

周囲から考古学的なものが多く出土し、他の地域からそれがないことから、この地が赤壁の戦いのあった場所であることは間違いないと考えます」

現実に地図で縮尺から逆算してみても川幅は二キロぐらいはある計算になる。「邪馬壹国の方法」八四ページにある人民中国《日文版》雑誌社によれば五〇〇〇六〇〇米とされ、帰国後そのニュースソースの神崎氏

赤壁之战/图 66



を神田東方書店に訪問したが、当の神崎氏は現在すでに退職されていて連絡は取れないとのこと。いずれにしても現在の赤壁から対岸までの川幅は二キロ程度であることについては認めざるを得ないように感じた。

三 関係資料での検証

①三国志呉書周瑜魯肅呂蒙傳第九では時劉備爲曹公所破、欲引南渡江（中

略、遇於赤壁。(中略)瑜等在南岸。

(中略)曹公軍吏士皆延頸觀望、指言蓋降。蓋放諸船、同時發火。時風盛猛、悉延燒岸上營落。頃之、煙炎張天、人馬燒溺死者甚衆、軍遂敗退、還保南郡。(中略)江表傳曰(中略)

時東南風急、因以十艦最著前、中江舉帆、蓋舉火曰諸校、使衆兵齊聲大

叫曰「降焉！」操軍人皆出營立觀。去北軍二里餘、同時發火、火烈風猛、

往船如箭、飛埃絕爛、燒盡北船、延及岸邊營寨。瑜等率輕銳尋繼其後、

雷鼓大進、北軍大壞、曹公退走。

②三国演義第四九回では

程昱入告曹操曰「今日東南風起、宜預隄防。」操笑曰「冬至一陽生、來復之時、安得無東南風?何足爲怪?」

軍士忽報江東一隻小船來到、說有黃蓋密書。(中略)黃蓋在第三隻火船上、濁披掩心、手提利刃、旗上大書

「先鋒黃蓋」。蓋乘一天順風、望赤壁進發。是時東風大作、波浪洶湧。操

在中軍遙望隔江、(中略)報稱「皆插青龍牙旗、內中有大旗、大書先鋒黃蓋名字。」操笑曰「公覆來降、此

天助我也!」來船漸近。程昱觀望良久、謂操曰「來船必詐、且休教近寨」

(中略)隨文聘船出、聘立在船頭、

大叫「丞相鈞旨南船且休近寨、就江心拋住。」衆軍齊喝「快下了篷!」

言未絕、弓弦響處、文聘被箭射中左臂、倒在船中。船上大亂、各自奔回。

南船距操寨止隔二里水面。黃蓋用刀

一招、前船一齊發火。火趁風威、風助火勢、船如箭發、煙燄障天。二十隻火船、撞入水寨。曹寨中船隻一時盡着、又被鐵環鎖住、無處逃避。

③考察

三国志は陳寿(二三三〜二九七)の編集にかかる。三国演義の方は、最も重要な作者は明代の羅貫中とされるが唐末の李商隱(八一三〜八五八)の詩のあとにも三国の事が伺われるとされるし、とりわけ宋代の蘇軾も大きな影響を与えている。

注目するべきは三国志も三国演義も南軍の突撃船から曹操の船までが二里となっており、三国志の場合は「二里餘」「三国演義の場合は「止隔二里」で意味としては「わずか二里しかなかった」感じである。思うに一里を四〇五米とするといかにも現実離れするので少しでも短くしようとした現れではないか。

どちらの場合も川幅そのものが二里ではなくて、両軍の先鋒が向かい合う距離が二里と言うことである。千米の所を川の上で怒鳴れば聞こえるかというのが一つのポイントとなる。また三国演義の方では旗に黄蓋の字をかいていたとあり、この識別の距離はどのくらいかも問題となる。しかし、これは短里説のはつきりした根拠にはならない。

もう一つは三国演義の方では二里に達する直前に文聘が弓で臂を打たれて船の上に倒れる場面がある。弓は弩より威力はなく、又弩の場合でも千米も飛ばせるものは三国時代では不可能というべく、少なくとも船の上で倒れて海に落ちるほどの威力はないと考えるべきであろう。しかし、三国演義に書いてあることが現実にはなく、短里の論拠にはとぼしい。ひ

かし、川辺から幾ばくか進み出たお互いがそれと認識する距離が二里であるから、川幅が八百米以下の場合には長里はしない。

四 周髀算経

結局正確な里の根拠は周髀算経にならざるを得ない。もともと本書は成立の年代がはつきりせず、(中国では一律にBC100

年としている)注者とされる趙君卿なる人物について

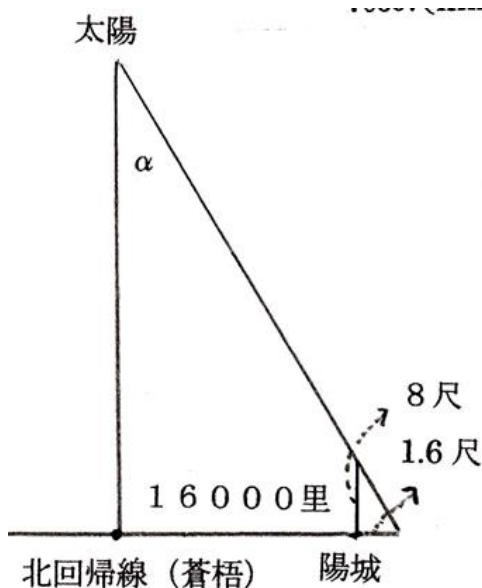
はつきりしたことが解らず、魏・晋の時代(二二〇〜三八五)であろ

うと言われていることが問題である

しかし注目するべ

きは、周の陽城から南へ一万六千里行くと夏至の時に太陽の影の長さがゼロになり、同じ時陽城では八尺の竿の陰が一尺六寸になると言う実験である。谷本氏はここで同じ周髀算経の中にある陽城から南へ千里離れる所では一尺五寸になり、北へ千里離れる所では一尺七寸になると言う点を根拠に七六米から七七米という計算をされる。

小生は、地球の周囲が四萬キロであることから、一萬六千里は何キロか比例計算して簡単に七九米という数値を得た。数学的には谷本氏の方が正しいと考えられるが、実際の測定に際しての一寸の正確な測定の方がむしろ難しいのではないかと思われる。いずれにせよ短里であることには間違いない。(夏至南萬六千



陽城の緯度は約35度

北回歸線の緯度は23.5度 緯度差は約11.5度
16000里=40000km (地球一周) X 11.5

$$\div 360 = 1277.77 \text{ km}$$

1里=79.86メートル

ために、趙君卿の計算は誤りであると長いこと認めてきていない。又現代の学者に取っては、周髀算經にある勾股の理（ピタゴラスの定理）がピタゴラスより独立して発見されたということに関心があるだけであり、これから計算される地球の大きさや太陽までの距離などおよそ実際の数値とはほど遠いことから、単に歴法と天文学史としての位置づけしか与えられていない。

周髀算經のもつ意義は、周代の一地域で短里が使われていたと言う事

里。中略。
日中立竿測影。中略。
周髀長八尺。夏至之日晷（きゝひかげ）一尺六寸。

趙君卿より後の学者が、地球が丸いと言うことを考えないでいろいろの計算をし、一里が四〇五米であると固執していた

実である。もつともこれは中国全土で使われていたという証拠にはならない。また趙君卿が魏の時代にいたと証明されても、魏の時代に使われていたという証拠にもならない。著者自身が周代の事だと書いているからである。

もう一つの問題点は帯刀氏が市民の古代第一五集で言われるように、三国志の時代のすべてが短里だけでは説明できない、むしろ長里が当てはまる場合が多いということである。しかし、周髀算經が言うところは、周や、魏の時代に短里を使っていた時代や地域があつたと言うことであり、中国全体に使われていた論証にも、魏の時代全体に使われていた論証にもならなくても、重要なことは、短里が使われていた場所や地域においては一里の長さは八〇米弱であるということである。

しからば、使われていた地域はどこかという点、少なくとも韓伝、倭人伝の地域は該当するといわざるをえない。魏志倭人伝には帯方郡から狗邪韓国まで七千里、狗邪韓国から対馬国まで千余里、対馬国から一大国まで千余里となっている。これは短里でしかあり得ない。短里であれば一里を八〇米弱で計算して、帯方郡から一萬二千里の所に邪馬壹国があることも疑いようがない。更に言

えば、近畿説がもつとも重要な論拠とする水行十日、陸行一月は不弥国からの旅程ではないことは後漢書を書いた范曄が証明している。范曄は陳壽の書を見て、逆に女王国から帯方郡までを一萬二千里とした。

もう一つ重要な点は周髀算經では三百歩をもつて一里として計算していることである。倭人伝に関する記述が短里であれば、歩も従来考えられていた六尺ではなく二七センチメートル程度にならざるをえない。これからすれば、卑弥呼の墓は径百歩ということとは、直径三十米未満であるということである。最近考古学者の間で箸墓古墳が卑弥呼の墓だという説が強くなりつつあるが、考古学が再度信頼を失わないよう祈るばかりである。

以上